

# 『更級日記』 試論

——存在と回想

一

十七日のつとめて立つ。昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。正布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし<sup>①</sup>

『更級日記』の前半、いわゆる上洛の記の中で、最初に書き遺された「朽ちもせぬ…」詠について、三角洋一氏は、日記執筆時の作者がこの歌にこめた思いを次のように推測している。

……いま日記の執筆にとりかかったばかりの孝標女は、「まののてう」の長者伝説とその遺跡にふれての感慨を詠んだ歌に、さらなる新たな思いとして、この日記が後の世の読者が彼女をしのぶよすがとなってくれればよいという祈りを籠めたと見たいのである。

加藤 睦

昔の門の柱が家の跡として残ったから、「正布を千むら万むら織らせ、晒させける」生活をしのぶことができる。それと同じように、『更級日記』が後世に伝わって、自分自身を偲ぶよすがとなってくれることを祈る思いをこめて、この歌が書き記されている可能性を指摘した、この三角氏の見解を踏まえつつ、伊藤守幸氏は、視点をやや移動させて、次のように論じている。

○最初の和歌を記し留める作者の思いが如何なるものだったのかという問は、もとより想像の範疇に属する事柄でしかないが、このように遠い過去を志向する歌が、言葉による過去の再構築を進める自伝作品の中に最初の歌として置かれているという事実の有する象徴性は、確かに注目に値すると言えよう。

○川の中に立つ四本の柱とは、さながら遠く過ぎ去った時の形見である。そんな時の形見に心動かされて歌を詠む少女の姿は、あたかも、過ぎ行く人生の形見として『更級日記』を書き進める作者の似姿のようでもある。

『更級日記』を「過ぎ行く人生の形見」とみなす伊藤氏の見解

はそのまま肯定されるものであり、その日記を書く行為と、昔の門の柱が残っていることへの感慨を「朽ちもせぬ…」と詠じたこととの間には、確かに同質性が見出されると思う。

またの夜も、月のいと明かきに、藤壺の東の戸を押しあけて、さべき人々物語しつづ月をながむるに、梅壺の女御ののほらせたまふなる音なひ、いみじく心にくく優なるにも、故宮のおはします世ならましかば、かやうにのほらせたまはましなど、人々言ひ出づる、げにいとあはれなりかし。

天の門を雲居ながらもよそに見て昔の跡を恋ふる月かな  
右の歌は、亡き中宮を偲ぶ同僚女房の思いに寄り添って孝標女が詠んだ歌であるが、「朽ちもせぬ…」詠と同じ「昔の跡」という言葉が用いられていることに注目される。

「昔の跡を知る」とことと「昔の跡を恋うる」ことの間には差異が認められる。しかしながら、「朽ちもせぬ…」詠の直前に次のように記されていることは注意してよい。

昔の門の柱のまだ残りたるとして、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

右の叙述は、人々が昔の跡をしのぶ歌を詠んだのを受けて「朽ちもせぬ…」詠が詠まれたことを示している。人々が昔の跡をしのぶことができるのも、柱が残っているおかげで昔の跡が知られるからだ、と孝標女は詠じたのである。「昔」として想起されているものが、長者の家と亡き中宮というように大きく異なりながら、二首の和歌に見られる「昔の跡」への感受性には連続性を認めることができるであろう。

伊藤氏は、『更級日記』に書き留められたさまざまな記事を概

観して、

『更級日記』を読む者は、そこに作者の年齢的变化を見ると同時に、時を超えて変わらない強固な自己同一性をも感取するはずだが、孝標女自身が、正にそのような複眼的視点を作中に設定しているのだから、それも当然のことである。

と述べている。「朽ちもせぬ…」詠は作者十三歳の詠歌であり、天の門を…詠は作者三十五歳の詠歌と推定されるが、その間に見出せる感受性の連続性は、右のように指摘される「自己同一性」の一端を示すものなのであろう。そしてその変化しない感受性の延長線上に、「人生の形見として」日記を書き残す営為があったと考えることができるように思う。

二首の和歌の発想に倣うようにまとめるなら、『更級日記』には、「跡を残し、人に知られ、偲ばれる」という願いによつて執筆された側面が確かにあったはずである。三角氏が「朽ちもせぬ…」詠に詠み取った「この日記が後の世の読者が彼女をしのぶよすがとなつてくれればよいという祈り」は、この作品の叙述にさまざまなかたで反響しているものと推測される。それを確認することを本稿の目的としたい。

## 二

『更級日記』には、次のように、かつてあったものが失われたことに目をとめた記事が散見する。

○浜名の橋、下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、跡だに見えねば舟にて渡る。入江にわたりし橋なり。

○八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。  
○瀬田の橋みなくづれて渡りわづらふ。

○十月つごもりがたに、あからさまに來てみれば、こぐらう茂れりし木の葉ども残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに見えわたりて、こちよげにさらき流れし水も木の葉にうづもれて、あとばかり見ゆ。

水さへぞすみたえにける木の葉ちる嵐の山の心細きに

このような記事ならびに和歌と、「朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし」の歌や、

宮路の山といふ所越ゆるほど、十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。

嵐こそ吹き来ざりけれ宮路山まだ紅葉ばの散らで残れるという記事を合せ見るとき、残らず消えてしまったものと、消えずに残ったものの双方に目をとめ、その一つ一つに感慨を覚える作者の心性が読み取れる。

そのような心性と連続性を有するのは、作者自ら次のように言及している、人の死去を深刻に受けとめる感受性である。

その五月のついたちに、姉なる人、子うみて亡くなりぬ。よそのことだに、幼なくよりいみじくあはれと思ひわたるに、まして言はむかたなく、あはれ恋しと思ひ嘆かる。

この感受性は、『更級日記』の性格そのものに反映していて、作中には姉の死の他にも、乳母、行成女、夫の死去が印象深く書きとめられており、作品の重要な構成要素をなしている。

その春、世の中いみじうさわがしうて、まつさとの渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむ

かたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。

このようにその死が深く嘆かれていて、作者にとつて大切な存在であったことが窺える、乳母についての記事は、作中に多くはなく、死去の記事の他には、「まつさとの渡りの月かげ」を描いた記事と、乳母をしのお思いを記した、「花の咲き散るをりごと」に、乳母亡くなりしをりぞかしのみあはれるに」という叙述しか見出せない。

作者ととても親しかった姉についても、それほど繰り返し詳しく記されているわけではなく、死去とその直後の記事の他は、行成女の生まれ変わりの猫が出現した際の挿話と、前年七月に近隣の家に尋ねて来た男が「萩の葉、萩の葉」と呼ばせた夜の挿話が記されているのみである。前者は、行成女死去の後日談の性格が強く、後者は、「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかが思ふべき」という不吉な姉の言葉が記されていて、姉の死去とつながりのある話になっている。

夫に関する記事もまた、死去の記事以外では、その直前に記された任地下向の様子だけが詳しい記事であり、そこにも「この暁に、いみじく大きな人だまの立ちて、京さまへなむ来ぬ」という不吉な前兆が語られている。

このように、乳母、姉、行成女(と猫)、夫の記事は、すべてその死去を中心に記されていることがわかるのである。

行成女の死去の記事では、彼女の書き残した拾遺集歌「とりべ山たにに煙のもえ立たははかなく見えしわれと知らなむ」を作者が見て、その死を悼んでいるが、この歌に示されているのは、「私が見たら、誰が茶毘にふされて煙となったのかを知り、私をし

のんでほしい」という願望であり、しのばれる側としのお側の違いはあるが、上洛の記に書きとどめられた「朽ちもせぬ…」詠に通い合う思いが看取される。

乳母の死去を、「まつさとの渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ」と記す、その記しかたが、「下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、跡だに見えねば」「こぐらう茂れりし木の葉ども残りなく散りみだれて」「こちよげにささらき流れし水も木の葉にうづもれて」という記述と、同じ型を共有していることに端的に表れているように、作者の関心は、確かに存在していた人が、はかなく亡くなってしまった、その変化の局面を記すことに収斂している。そこで行われているのは、かつて確かに存在した人の「跡」を、日記に記しとどめようとする行為であると言つてよいであろう。

### 三

佐藤和喜氏は、『更級日記』の所収歌の中に「有明の月」を詠んだ歌が三首見出せることに注目し、「いづれも「有明の月」を末句に据えた、月に対する観照的な姿勢の強い詠歌となつていゝ」と評して、和歌史的観点からその意義を次のように論じている。<sup>4</sup>

末句「有明の月」歌で観照的な態度を示すものを積極的に採るようになるのは千載集からであり、その意味でも、更級日記の三首は多く、後代の魁となるものと言い得よう。

『更級日記』において、そのように有明の月が好んで詠まれているのはなぜだろうか。そのことを考えるために、三首の歌を状

況ごと引用して検討してみよう。

① 八月になりて、二十余日の暁がたの月、いみじうあはれに、山の方はこぐらく、滝の音も似るものなくのみながめられて、

思ひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月

② 二年ばかりありて、また石山にこもりたれば、よもすがら雨ぞいみじく降る。旅居は雨いとむつかしきものと聞きて、葦を押し上げて見れば、有明の月の谷の底さへくもりなく澄みわたり、雨と聞こえるは、木の根より水の流るる音なり。

谷川の流れは雨と聞こゆれどほかより異なる有明の月

③ 三日「初瀬に」さぶらひて、まかでぬれば、例の奈良坂のこなたに、小家などに、このたびは、いと類ひろければ、え宿るまじうて、野中にかりそめに庵つくりて据ゑたれば、人はただ野にゐて夜を明かす。草の上に、行簾などをうち敷きて、上にむしろを敷きて、いとはかなくて夜を明かす。頭もしとどに露おく。暁がたの月、いといみじく澄みわたりて、世に知らずをかし。

ゆくへなき旅の空にもおくれぬは都にて見し有明の月

①の「暁がたの月、いみじうあはれに」、②の「有明の月の谷の底さへくもりなく澄みわたり」、③の「暁がたの月、いといみじく澄みわたりて、世に知らずをかし」には、孝標女が有明の月を美しく思い賞美している様子が示されている。しかし、そのような好尚はそれ自体で完結しているわけではないように思われる。

②には、「よもすがら」雨の音を聞いて葦を上げたところ、意外にも有明の月があたりを明るく照らしていたという経過が示され、③では、「夜を明かす」という表現が二度用いられていて、

有明の月が、それに先立って過ぎされた夜の時間とともに示されている。これに対し、①には、夜を明かすことを示す表現はないが、「思ひ知る…」詠の下句「秋の夜ふかき有明の月」が、眠ることなく過ぎして来た夜の側から「有明の月」をとらえた表現となっている。

次に引く記事においても、明け方の月は、夜明けにいたるまで過ぎた時の経過を受けて眺められていることが確認される。

○十二月二十五日、宮の御仏名に召しあれば、その夜ばかりと思ひて参りぬ。白き衣どもに、濃き搔練をみな着て、四十余人ばかり出でたり。しるべし出でし人のかけに隠れて、あ  
るが中にうちほのめいて、暁にはまかづ。雪うち散りつつ、  
いみじくはげしく冴え凍る暁がたの月の、ほのかに濃き搔練  
の袖にうつれるも、げに濡るる顔なり。道すがら、

年は暮れ夜は明け方の月影の袖に映れるほどぞはかなき  
○またの年の八月に、内裏へ入らせたまふに、夜もすがら殿上  
にて御遊びありけるに、この人のさぶらひけるも知らず、そ  
の夜は下に明かして、細殿の遺言を推しあげて見出したれば、  
暁がたの月のあるかなきかにをかしきを見るに、杳のこゑ聞  
こえて、読経などする人もあり。

このように、有明の月は、夜通し起きていて明け方を迎える経  
過とともに記されている。眠らないで明け方まで過ごす、そのよ  
うな夜の時間は、『更級日記』の中で、繰り返し描かれ、いわば  
偏愛の対象となっている。

A そのつとめて、そこを立ちて、下総の国と武蔵との境にてあ  
る太井川といふが上の瀬、まつさとの渡りの津にとまりて、

夜ひとよ、舟にてかつがつ物など渡す。

B 二村の山の中にとまりたる夜、大きな柿の木の下に庵を造  
りたれば、夜ひとよ、庵の上に柿の落ちかかりたるを、人々  
ひろひなぞす。

C 美濃の国になる境に、墨俣といふ渡りして、野上といふ所に  
着きぬ。そこに遊女ども出でて来て、夜ひとよ、歌うたふにも、  
足柄なりし思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。  
D その十三日の夜、月いみじくまなく明かきに、みな人も寝  
たる夜中ばかりに、縁に出でて、姉なる人、空をつくづく  
とながめて、……かやうに明るるまでながめ明かいて、夜明  
けてぞみな寝ぬる。

E あづまに下りし親、からうじてのほりて、西山なる所に落ち  
着きたれば、そこにみなわたりて見るに、いみじううれしき  
に、月の明かき夜ひとよ、物語などして、……

F 冬になりて、月なく、雪も降らずながら、星の光に、空さす  
がにくまなく冴えわたりたる夜のかぎり、殿の御方にさぶら  
ふ人々と物語し明かしつつ、明くればたち別れたち別れしつ  
つまかでしを思ひ出でければ、

月もなく花も見ざりし冬の夜の心にしみて恋しきやなぞ  
われもさ思ふことなるを、同じ心なるをかして、

宵えし夜の氷は袖にまだ解けて冬の夜ながら音をこそは  
立け

G 御前に臥して聞けば、池の鳥どもの夜もすがら、こゑこゑ羽  
ぶささわぐ音のするに、目も覚めて、

わがごとぞ水のうきねに明かしつつ上毛の霜をはらひわ

ぶなる

Hうちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむ  
かしと思ひて、おこなひ明かす。

Iいといみじうわびしくおそろしうて、夜を明かすほど、千年  
を過ごすこちす。からうじて明けたつほどに、……

J同じ心に、かやうに言ひかはし、世の中の憂きもつらきも  
かしきも、かたみに言ひかたらふ人、筑前に下りてのち、月  
のいみじう明かきに、かやうなりし夜、宮に参りて会ひては、  
つゆまどろまず、ながめ明かいしものを、恋しく思ひつつ寝  
いりにけり……

このように、寝ないで明かされた夜の時間が繰り返し繰り返し  
記しとどめられている理由は何だろうか。全体を見渡して目立つ  
のは、D、E、F、Jのように、親しい人との語らいの夜が記さ  
れていることである。そのような経験が懐かしく思い出され、日  
記に書き遺されたのは自然である。

しかし、その一方で、この中には、単に寝られなかつた夜も含  
まれ、Iのように、明らかに懐かしさを誘わないと思われる経験  
まで回想されている。とすれば、その夜の経験がどのようなもの  
であつたかというとは別に、夜通し過ごしたことに特別な意  
味が見出され、回想されているのではないだろうか。

そのことは、「夜ひと夜」「夜もすがら」「明かす」と一対をな  
す「日ぐらし」「日ねもす」「暮らす」の作中における用例を見渡  
すことよつて確認されるだろう。

Kいみじく泣きくらしで見出だしたれば、夕日のいとはなやか  
にさしたるに、桜の花残りなく散り乱る。

Lはしるはしる、わづかに見つつ心も得ず心もとなく思ふ源氏  
を、一の巻よりして、人もまじらず几帳の内にうち臥して、  
引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐ  
らし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを  
見るよりほかのことなければ……

M物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたる  
かぎりには、これをのみ心にかけてるに、

Nこのつごもりの日、谷の方なる木の上に、ほととぎす、かし  
かましく鳴いたり。

都には待つらむものをほととぎすけふ日ねもすに鳴き暮  
らすかな

などのみながめつつ、……

Oいとど人めも見えず、さびしく心ほそくうちながめつつ、い  
づこばかりと明け暮れ思ひやる。道のほども知りにしかば、  
はるかに恋しく心ほそきことかぎりなし。明るるより暮るる  
まで、東の山極をながめて過ぐす。

P冬になりて、日ぐらし雨降り暮らいたる夜、雲かへる風はげ  
しううち吹きて、空晴れて月いみじう明かうなりて、

Q暁には夜深く下りて、日ぐらし、父の老いおとろへて、われ  
をこし頼もしからむかげのやうに思ひ頼み向ひみたる  
に、恋しくおぼつかなくのみおほゆ。母亡くなりし姪ども  
も、生れしより一つにて、夜は左右に臥し起きするも、あは  
れに思ひ出でられなどして、心もそらにながめ暮らさる。

右の引用箇所を見てわかるのは、夜と同じように、昼において  
も孝標女が過ごした時間が繰り返し繰り返し記されていることで

ある。その記事は、全体として懐かしく回想されるような幸福感に乏しく、L、Mは、物語に耽溺して過した幸福な時間であるが、執筆時の作者の思いを考えると、単純に懐かしい経験であったとも言えない。

Lの「昼は日ぐらし、夜は目のさめたる限り」、Mの「昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎり」は、物語への耽溺の深さを、どれほど読み続けたか、どれほど思い続けたかということによって示した表現になっており、Oの「明くるより暮るるまで」もまた、任地に下って行った父への恋しい思いの深さを、やはり時間の経過によって強調している。

このような叙述から帰納できるのは、嘆いたなら嘆いたなりに、楽しかったなら楽しかったなりに、その経験を回想し書き留めるに足るものとなしているのは、そこで費やされた時間であるという感じ方であろう。

○……かやうに明くるまでながめ明かいて、夜明けてぞみな人寝ぬる。

○……夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ人々と物語し明かしつつ、明くればたち別れたち別れしつつまかでしを……

○いといみじうわびしくおそろしうて、夜を明かすほど、千年を過ぐすこちす。からうじて明けたつほに、……

右の三か所の叙述に見える、「明くるまでながめ明かいて、夜明けてぞ」「夜のかぎり……明かしつつ、明くれば」「夜を明かすほど、……からうじて明けたつ」という表現は、表現が重複して稚拙な印象を与えるが、過ごした一夜の時間の終わりの終わりまで書き記し、そのことによって、経験を意味あるものとして定着さ

せようとする志向の表れではなからうか。

同じ志向は、次の和歌の「入日のかげは入りはてて」にも看取することができるであろう。

帰りて、夕日けざやかにさしたるに、都の方も残りなく見や  
らるるに、このしづくに濁る人は、京に帰るとて、心苦しげ  
に思ひて、またつとめて、

山の端に入日のかげは入りはてて心ほそくぞながめやら  
れし<sup>5)</sup>

孝標女にとつては、一日あるいは一夜を、その終わりまで過ごしたということ自体が、人生の一齣として回想し書き記すに値する経験の要件であると捉えられていたのである。そしてその経験を記すことによって、その長い時間を明かし暮らした自分が確かに存在したのだということを、日記に留めようとしたものと思量されるのである。

#### 四

その夜は、くるとの浜といふ所に泊まる。片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風のおともいみじう心ほそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじこよひならではいつか見むくるとの浜の秋の  
夜の月

伊藤氏は、この「まどろまじ……」の歌について、次のように述べている。

旅の途中で目に触れる一期一会の風景の貴重さを慈しむような思いのこめられた歌である。眼前の光景に対する愛惜の思いを伝えるこの歌は、現在の瞬間に対する切実な愛着を示すものとなっているが、同時にこの歌は、「今宵ならではないか見む」という表現において、その「現在」を遠くから俯瞰するまなざしを覗かせるものもなっている。

伊藤氏によって、「現在の瞬間に対する切実な愛着」を読み取られたこの和歌の、「まじろまじ」という表現には、次の引用箇所と同質の、夜通し過ごすことに特別な意味を見出す志向が看取され、そのような心性が、孝標女十三歳の時の詠歌に早くも内包されていることが注目される。

かやうなりし夜、宮に参りて会ひては、つゆまじろまじ、ながめ明かいしものを……

この歌にはもう一つ注目すべき要素があるように思う。それは、「くろとの浜の秋の夜の月」という表現に表れているように、秋の夜に月を眺めつづけている場所としての、くろとの浜に対する深い思い入れが詠まれていることである。これと同様の、場に対する感受性は、次の和歌にも見て取ることができる。

○念仏する僧の暁にぬかづく音の尊とく聞こゆれば、戸を押しあげたれば、ほのほのと明けゆく山際、こぐらき梢ども霧りわたりて、花紅葉の盛りよりも、なにとなく茂りわたれる空のけしき曇らはしく、をかしきに、ほととぎすさへ、いと近き梢にあまたたび鳴いたり。

誰に見せ誰に聞かせむ山里のこの暁もをちかへる音も  
○八月になりて、二十余日の暁がたの月、いみじくあはれに、

山の方はこぐらく、滝の音も似るものなくのみながめられて、思ひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月  
このような、自分が身を置いている場に対する深い思い入れは、そこを去る時の名残惜しさ、そこを去った後の恋しさというように、『更級日記』の中でさまざまに変奏されている。

①門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや屋の、蔀などもなし。簾かけ、幕など引きたり。南は遙かに野の方見やらる。東西は海近くていとおもしろし。夕霧たちわたりていみじうをかしかれば、浅寝などもせず、かたがた見つつ、ここを立ちなむこともあはれに悲しきに……

②見る目のいときたなげなきに、声さへ似るものなくうたひて、さばかりおそろしげなる山中に立ちてゆくを、人人あかず思ひてみな泣くを、幼き心地には、ましてこのやどりを立たむことさへあかずおほゆ。

③またの日、山の端に日のかかるほど、住吉の浦を過ぐ。空も一つに霧りわたれる、松の梢も、海の面も、浪の寄せる渚のほども、絵にかきても及ぶべき方なうおもしろし。

いかに言ひ何にたとへて語らまし秋の夕べの住吉の浦  
と見つつ、綱手ひき過ぐるほど、返り見のみせられて、あかずおほゆ。

右のうち、①には、「浅寝などもせず、かたがた見つつ」とあり、風景に魅了されている様子が記されているが、それとともに、その地を立ち去ることへの名残惜しい思いが記されている。②でも、「このやどりを立たむこと」が「あかず」思われており、③でも、「秋の夕べの住吉の浦」を過ぎ去ることが「あかず」惜し



まれている。①・②は十三歳の経験を回想したものであり、③は四十七歳の経験の回想であるが、そこには印象深い経験をした「場」に対する一貫した思い入れが看取されるのである。

④ひろびろとももの深き深山のやうにはありながら、花紅葉のをりは、四方の山辺も何ならぬを見ならひたるに、たとしへなくせばき所の、庭のほどもなく、木などもなきに、いと心憂きに、向ひなる所に、梅紅葉など咲きみだれて、風につけてかかへ来るにつけても、住み馴れしふるさとかぎりなく思ひ出でらる。

にほひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅ぞ恋しき  
⑤旅なる所に来て、月のころ、竹のもとと近くて、風の音に目のみ覚めて、うちとけて寝られぬころ、

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめしてなにともなきにものぞ悲しき

秋ごろ、そこを立ちて外へうつろひて、そのあるじに、  
いづことも露のあはれはわかれじをあさちが原の秋ぞ恋しき

右の④・⑤では、なじんだ場所を離れた後に、その場所を恋しく思う心情が描かれている。以上の①～⑤にみられる作者の心性は、次のように概観できるであろう。まず、ある場所での経験それ自体と、その場に対する深い思い入れがあり、その思い入れが、その場を去るにあたっての名残惜しさや、場を去った後の恋しい気持ちにつながっている。そして、そのような心性は、日記執筆時の作者にも受け継がれており、過去におけるそれぞれの思いが、回想され、反芻されているのだらうと。

そのように、場への思いが繰り返し記されていることには、それぞれの場に身を置いていた自身の存在を、確かに日記に書きとどめようとする、作者の思いが読み取れるように思われる。

## 五

念仏する僧の暁にぬかづく音の尊とく聞こゆれば、戸を押しあけたれば、ほのほのと明けゆく山際、こぐらき梢ども霧りわたりて、花紅葉の盛りよりも、なにとなく茂りわたれる空のけしき曇らはしく、をかしきに、ほととぎすさへ、いと近き梢にあまたたび鳴いたり。

誰に見せ誰に聞かせむ山里のこの暁もをちかへる音も  
このつごもりの日、谷の方なる木の上に、ほととぎす、かしかましく鳴いたり。

都には待つらむものをほととぎすけふ日ねもすに鳴き暮らすかな

などのみながめつつ、もろともにある人、「ただ今、京にも聞きたらむ人あらむや。かくてながむらむと思ひおこする人あらむや」など言ひて、

山ふかく誰か思ひはおこすべき月見る人は多からめども  
と言へば、

深き夜に月見る折は知らねどもまづ山里ぞ思ひやらるる  
この一連の文章には、これまで見てきたような『更級日記』を特徴づける要素が、複合的に看取される。まず、明け方の情景がそれ以前に過ごされた時間を受けて描かれており、「日ねもすに

鳴き暮らす」ほととぎすが詠まれていること。山里という場に対しての思い入れが表現されていること。さらに叙述全体から、山里において夜を明かし日を暮らす作者の存在が感じ取れることなどである。それとともに、これもやはり人の存在ということに関わる「思ひおこす」「思ひやる」という行為が、「もろともにある人」と孝標女との間で話題になっていることにも注意される。

○雪の、日を経て降るころ、吉野山に住む尼君を思ひやる。

雪降りてまれの人目も絶えぬらむ吉野の山の峰のかけ道  
○親族なる人、尼になりて、修学院に入りぬるに、冬ごろ、

涙さへふりはへつづぞ思ひやるあらし吹くらむ冬の山里  
右の二か所の記事で、孝標女は、出家して尼になった知人・親族の生活を、その生活する場所「吉野の山」「冬の山里」とともに思いやっている。

このうち、一つ目の記事に見える、「吉野山に住む尼君」について、集成は「出家した、姉の乳母か」と注する。この推定は、いまだ通説となるに至っていないが、姉の死去から続く一連の記事の流れの中で自然に生ずる理解であり、首肯すべき推定と考える。その姉の乳母との別れに際し、作者と乳母の間に次のような贈答歌が詠み交わされている。

乳母なりし人、「今は何につけてか」など、泣く泣くもとあ  
りける所に帰りわたるに、

「ふるさとかくこそ人は帰りけれあはれいかなる別れな  
りけむ

昔の形見には、いかでとなむ思ふ」など書きて、「硯の水の  
凍れば、皆とぢられてとどめつ」と言ひたるに、

かき流すあとはつららにとぢてけりなにを忘れぬ形見と  
か見む

と言ひやりたる返りごとに、

慰むるかたも渚の浜千鳥なにかうき世に跡もとどめむ

この流れにおいて読むとき、「思ひやる」行為が、「忘れない」と深く関係していることが見えてくるであろう。作者が出家後の乳母を思いやる歌を詠んだことは、乳母が「うき世に跡を」とどめまいとして出家した後も、姉を忘れないための形見として、乳母の存在を忘れないという意味をもっていたことがわかるのである。

二つ目の記事においても、作者が思いやった相手は世を遁れた尼であって、「思ひやる」には、世を遁れた人の存在を忘れないで思ひ出すという意味合いが含まれていたはずである。

先に引用した「深き夜に月見る折は知らねどもまづ山里ぞ思ひやらるる」詠も同様であるが、作者が「思ひやる」他者は、寂しく日々を送る他者であるとともに、ともすれば、その存在が忘れられそうな他者なのであった。

東山での生活で、「もろともにある人」が発した、「ただ今、京にも聞きたらむ人あらむや。かくてながむらむと思ひおこする人あらむや」という言葉は、他者から忘れられず思いやられることを願った言葉と思われるが、これまで確認してきた『更級日記』の叙述の性格を考え合わせると、自身の存在が他者から忘れ去られることを悲しみ、思い出されることを願う作者の祈りが、この「ただ今……」という言葉に共鳴し反響していることが想像されるのである。

## 『更級日記』の最終歌、

世の常の宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら

について、かつて、これを作者の自詠として読むことの妥当性を考察した際に、夫の死の記事から最終歌に至る一連の構成について、次のように述べた。<sup>6)</sup>

自身の現状に夫に先立たれた後の孤独な生活を、「世の常の……」と対象化した認識は、『更級日記』を、夫の死以前の記事を綴っていたようにはもはや書けなくなっていることの認識、これ以上書き続ける動機なり主題なりがもはや存在しないこととの認識につながるものである。この意味において、

『更級日記』の末尾に「世の常の宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら」という歌が置かれていることには、一定の必然性を見出すことができると思うのである。

右の論述において、私は、物語への耽溺とそれがもたらした不幸といったものに、『更級日記』の中心的主題を認め、最終歌に至る一連の記述を、そこから外れたものと位置づけた。けれども、本稿で見出した、作品の性格と響き合う、さまざまな叙述のありようとそこに看取される一貫した作者の心性を踏まえるとき、最終歌に至る叙述を、きわめて『更級日記』らしいものと捉え直す必要があると考える。

夫の死後、最終歌に至る日記の叙述には、次の五首の歌が配されている。

月も出でて闇にくれたる姨捨に何とて今宵たづね来つらむ  
今は世にあらじものと思ふらむあはれ泣く泣くなほこそは  
経れ

ひまもなき涙にくもる心にも明かしと見ゆる月の影かな

茂りゆく蓬が露にそぼちつづつ人に訪はれぬ音をのみぞ泣く

世のつねの宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら

このうち、「ひまもなき……」詠を除く四首には、これまで確認してきた、作者の心性を特徴づける要素がはつきり看取される。

「月も出でて……」の歌は、甥が思いがけず訪ねて来てくれた際の詠歌であるが、歌中の「姨捨」は、自身を世から捨てられ忘れられた存在として捉えた表現であり、そのような自分を甥が思い出してくれたことを喜ぶ心情が詠まれている。

「今は世に……」の歌は、夫の死後、音沙汰がなくなった「ねむごろに語らふ人」に贈った歌であり、自分が親しい知人から「世にあらじもの」と思われていると嘆き、「なほこそは経れ」と、自分が存在していることを伝えている。

最終歌を含む残りの二首は、「茂りゆく蓬が露にそぼちつづつ」「世のつねの宿の蓬」と、作者が身を置いている「場」を示し、「久しうおとづれぬ」尼に向かつて、自身の存在を忘れずに「思ひやれ」と希求した歌である。

右の四首の歌が、自身の存在が他者から忘れられることへの嘆きと、思い出され、思いやられることを願った歌であることは明白である。そのことを心にとめて読めば、最終歌の「思ひやれ」という願いに、人生の形見として『更級日記』を書き綴ってきた作者の、自分の存在を忘れないでほしい、思い出してほしいとい

う祈りの反響をはつきりと聞き取ることができるとは、必ずである。

注

(1) 『更級日記』からの引用は、秋山虔校注『新潮日本古典集成 更級日記』（一九八〇年、新潮社）により、一部表記の改変を行った。

(2) 三角洋一「更級日記 歌ことば」『国文学』一九八一年一月。

(3) 伊藤守幸「東海道上洛の記の時間構造について」（『更級日記の遠近法』二〇一四年、新典社）。伊藤氏の見解・考察の引用は、すべて同論考による。

(4) 佐藤和喜「更級日記歌の位相」（『平安和歌文学表現論』一九九三年、有精堂）。

(5) 佐藤氏は、「山の端に…」詠の作者について、諸注が「このしづくに濁る人」であると認定していることに不自然さを見出し、孝標女を作者と考える立場から、次のように論じている。

〔更級日記歌の再検討〕（『国語と国文学』一九九五年六月）

不自然だと言うのは、西山に入る夕日を見て、東山を眺めやると言うことになる点である。西山を見ている主体は身体を反転させて東山を眺めることになるのである。…これを素直に読む限り、上三句と下二句の視線の方向性は変わっていない。つまりともにここから西へと向かっているということになるだろう。

この佐藤氏の読みは、歌の表現・構造に忠実で、妥当な見解と思われる。歌の直前に「またつとめて」とあるのも、その下に内容を補うとすれば、「都から歌が届いた」という内容よりも、「こちから詠み送った」という内容のほうが自然であると思われるので、本稿においても「山の端に…」詠を孝標女の詠歌として扱う。

(6) 拙稿「『更級日記』最終歌の解釈について」（『立教大学日本文学』二〇〇九年七月）。

（かとうむつみ 本学教授）